

代々木病院の理念

ヒューマニズムにもとづく医療・介護の実践

くらしと健康

発行 医療法人財団 東京勤労者医療会 1部90円
〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷1-30-7
TEL (03)4376761
E-mail address yo_sosiki@tokyo-kinikai.com
友の会会員は会費に購読料がふくまれています。



真剣に耳を傾ける参加者

被爆者の心の傷を追って

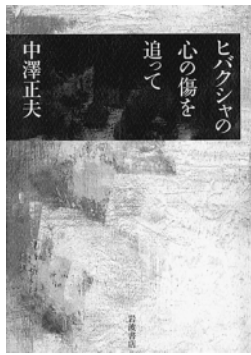
精神科 中澤正夫医師が講演

代々木病院では7月16日、全職員集会で精神科の中澤正夫医師から「被爆者の心の傷」について学びました。講演後には、8月4日〜6日に広島で開催される2008原水爆禁止世界大会代表参加予定者の壮行会を行いました。中澤医師の講演要旨を紹介いたします。

(文責＝編集部)

いま、どんな被爆者 とき、代々木病院には、に聞いても、一番つら 被爆診療科があり、千 いのは心の傷だとい 葉医師(故人)が中心 ます。心の傷は、いく になって医療を行い、 らたってもおられない 多くの被爆者が受診し と言いつづけています。 ていました。千葉先生 の診療依頼で被爆後、 しかし、被爆者の心の 精神疾患を発症した人 を診察するようになり ますが、当時は、多く うがないのです。私 の方が精神科受診を 「また差別される」と 感じて、5分の1くら いのしか受診してく れませんでした。そう いう患者さんが少しず つ増えてきて、199 7年、「被爆して精神 障害をもった37名につ いて」という論文を野 中医師がトップネーム で発表しました。この とき被爆者の精神障害 についての先行論文を すべて当たりました

が、あまりにも数が少 ないのに驚きました。 書で、新しい精神病が できたのではと注目さ れたのが、「原爆ブラ ンラ病」でした。原爆 ブランラ病は、検査し ても異常値が見つから ない、風邪をひいても なかなか治らない、体 がだるいなど、ブラ ンラしているしかない 人たちの状態をさしま す。 それは、慢性的放射 能障害、いまでいへば 内部被爆という推定を している人たちもいま は考えませんでした。 私たちの追跡でも、原爆ブラ ンラ病は、低線量被 爆、慢性原爆症とし て、野中先生や大谷・ 遠山先生と一緒に研 究した37例をさらに10 年間追跡した結果、ブ ランラ病の患者さんが などからくる不安な状 態)など、いつも原爆 のことを気にしている と生きたら、ブラ ンラ病というのは、軽 微な放射能障害である だけではなく、どんな 被爆者を見ても一回は 必ずかかっている、あ りたい、何が記憶 を飛ばして断絶させて



2007年、岩波書店から発行

原水禁世界大会代表参加者壮行会も

神科特有の病氣として 国外に「原爆ブランラ デジーズ」という名 で流れていきました。 心、被爆というなら は、精神的に正常の 人にある「心の傷」で なくてはならないと私 は考えました。私たち は過去の身体障害はな け、過去の研究 達しました。 しかし、過去の研究 必すかかっている、あ りたい、何が記憶 を飛ばして断絶させて



原水禁世界大会代表参加予定職員を激励する中澤医師

り、被爆者が神経症・ 心気症のハイリスクケ ループであることだけ は明らかにしていまし た。「ブランラ病」とい う概念がまかり通った ために、我々とても 遠回りをしたという感 じがします。 被爆者の心の傷の解 明にむけ、1990年 代後半から、被爆者が 「見なかったもの」あ りたい、何が記憶 を飛ばして断絶させて

普通の人同士として 一緒にお酒を飲んだ り、自宅を訪問したり して、同じ時代を生き たもの同士の交流の中 で出てきたもの、そこ まで仲良くなってあら ためて聞き取りをし てみて初めて、きわめて 記憶の欠損と時系列的 乱れが多いことがわか りました。 あのような地獄のな かで見えたもの聞いたも のを全部覚えていたほ うが不自然で、忘れて いるほうが自然です。 それにもかかわらず、 被爆者後援会では「見 捨て体験」といいます が、それは、その人が 被爆したあと安全地帯 に行っただけで、自分 が「どうしてあんなこと をやってしまったんだ ろう」という……。

【以下次号に続きます】

全職員集会で学習 代々木病院

手術台

63回目の 原爆忌が来る。 仏教でもせいぜいで 33回忌で終 わりである。 長らく続くという事 は、もはや、全人類の 命が核廃絶に懸かっ ていることを誰も承 認しているからであ る。今年も若い 職員が原水爆禁止大 会に出かける。帰れ ば必ず反対の流れに 合流してくれる。 う れしいことである。 今年には原爆症認定 訴訟が次々に勝訴し ている中で開かれる。 勝訴といつてもいま 罷っている種だが 「被爆が原因である」 ことを国に認めさせ たという、ささやか な勝利である。被爆 者の願いは、国が陳 謝し、裁明させずと とも、認めさせること である。被爆者には 時間が無い。痺れを 切らしたかの様に、 ピースボートは 8月末日出航の世界 一周のクルーズに被 爆者100人を招待 した。4カ月間世界 各地で被爆体験を訴 える企画である。驚 くことはない。代々 木病院には多くの被 爆者が治療や健診に 訪れたい。その一人 一人に真心こめて 接し、耳傾ける日常 を、大会に人を送る ことより大切にする ことである。(ま)